



MUSASHINO^{Vol.127} *for* TOMORROW

巻頭

無限に広がる朗読の世界

中井貴恵(女優・エッセイスト)

卒業生インタビュー

アンサンブル好きから
コレペティートアに

平野小百合

(コレペティートア／ウィーン国立音楽大学声楽科専任講師)

表紙：江古田キャンパス メインエントランス

October 2018
vol.127

無限に広がる 朗読の世界

中井貴恵
(女優・エッセイスト)

小津安二郎監督の映画を朗読する
「音語り」のワンシーン



中井貴恵 Kie Nakai

1978年映画「女王蜂」でヒロインデビュー。1982年映画「制覇」で日本アカデミー助演女優賞を受賞。その後数々の映画、ドラマに出演。1998年より『大人と子供のための読みきかせの会』の代表をつとめ、公演は現在までに1350回以上に及ぶ。2009年にスタートした小津安二郎監督映画を朗読する「音語り」シリーズ6作を全国で公演中。2013年映画「じんじん」に出演。2015年人気小説「あん」を原作者ドリアン助川氏と二人で演じる「朗読劇あん」を初演。2017年から「おとな絵本の朗読会」シリーズも公演中。主な著書「ニューイングランド物語」「父の贈りもの」、再話本に「くるみわり人形」「はだかの王さま」等。

映画隆盛期の大スターであり、37歳という若さで亡くなった佐田啓二さん。数々のテレビドラマ、舞台でおなじみの俳優、中井貴一さん。お二人を父、弟に持つのが、今回ご登場の中井貴恵さんです。ご本人も大学在学中の銀幕デビュー以来、映画、テレビドラマ、バラエティ、さらにはCM、エッセイと幅広い分野で活躍されています。これまでのキャリア、その中で出会った人々を振り返っていただくとともに、近年力を入れておられる音楽とコラボした朗読の活動についてお話をうかがいました。
(2018年7月24日インタビュー)

演技経験なしに 女優デビュー

中井さんは、早稲田大学在学中の1978年、映画『女王蜂』（市川崑監督）で女優デビューする。タイアップした口紅のCMも頻繁に流され、いち

やく人気者となった。しかしながら、それまで演技経験はまったくなく、右も左も分からないまま入った女優の道。当初は、苦労の連続だったという。

「父の13回忌の法要のときの写真が週刊誌に載り、それを見た映画会社の方が出演しないかと誘ってくださいました。母からは『出る、出ないは、あなたが決めなさい。私はどちらの判断でも尊重します。でも、この話はあなたにとって身に余るものだということは覚えておきなさい』と言われました。元々志望していた道ではないし、出来るかどうか分からない、大学にも通い続けたい。人生で一番悩みましたね。とりえずこの仕事をやってみて、次のことはまた考えればいい、と決めて出演に踏み切りました。

最初は、ひどいものでした。とにかく“普通”ができない。『普通に歩いてごらん』と言われても、カメラの前だとどこちない動きしかできないん

です(笑)。でも市川監督は私がズブの素人だと分かってくれていましたから、怒ることなく、『3歩あるいて、髪をかき上げて』というような分かりやすい演技指導をしてくださいました。何もできなくてかなり落ち込みましたが、かつて父と共演したことのある大先輩の方々がとても優しくしてくださり救われました。口々に父の思い出話を聞かせてくださって、とても嬉しかったですね」

とりあえずこの1本という気持ちで出演したデビュー作以後も中井さんは着実に女優としてのキャリアを積み、1982年には『制覇』(中島貞夫監督)、『あゝ野麦峠 新緑篇』(山本薩夫監督)での演技で日本アカデミー賞助演女優賞(優秀賞)を受賞する。

「仕事が面白い、演技をするのが楽しいと思えるようになるまで5年ほどかかりました。大勢の人が一緒になって一つのものを作る、その歯車の一つに自分がなって作品が出来上がる。お客さんに見えるのは出演者だけでも、裏にはその何十倍ものスタッフが必死で働いて映画や舞台が出来上がる。一人欠けてもダメ、みんなで作る楽しさ、それがこの仕事の醍醐味ではないでしょうか。

ただ、当時の現場は過酷でした。現在とは違い労働時間に関する規制もルーズで、真夜中2時、3時まで撮影し、続きはまた早朝から…なんてこともしょっちゅう。夏のシーンを冬に撮る、冬のシーンを夏に撮る、というのも大変でした。真夏の暑いなかセーターを着込み、汗をかくこともできない。真冬に夏のシーンを撮るときには、浴衣姿で震えながら、息が白くならないよう直前まで氷を口に入れて冷やしておいたり。一見華やかな芸能界ですが、実は大変な肉体労働を強いられる過酷な世界なのです(笑)」

祖父のような 小津監督

父・佐田啓二さんを通して、またご自身のキャリアの中で中井さんは数多くの監督と出会ってこられた。中でも小津安二郎監督と木下恵介監督とはひとときわ親しくされたという。お二人は揃って中井さんのご両親の仲人を務め、貴恵さん、貴一さんの名付け親にもなった。

「小津先生は、しょっちゅう我が家にいらっしゃいました。ご自宅が鎌倉で、遅くなると帰るのが面倒臭くなって我が家にお泊りになるんです。先生専用の部屋があったくらいですから。小さかった私には、映画監督がどういうものか分かりませんでした。ただ、いつも酔ったおじさんがいるなど。本当の孫のように可愛がってくださり、私にお酒を仕込んだのも小津先生です(笑)。あと監督で思い出すのは、『あゝ野麦峠』の山本薩夫監督。これでもかというくらい、しごかれました。衣裳部屋に閉じ込められて台詞を覚えさせられたり、今だったら絶対にパワハラです(笑)。

出演した作品で特に好きなのは、ビートたけしさんと共演した『哀しい気分でジョーク』(瀬川昌治監督)。たけしさんは、子供が癌で死んでしまうコメディアン役でした。まさか後にこんなにビッグな映画監督になれるとは思いませんでした。とってもシャイな方でした」

大人と子供のための 読みきかせの会

中井さんは1998年に、幼馴染み、娘さんのママ友、その妹さんたちと



▲ 森山京作品「きいろいばけつ」の読みきかせ

「大人と子供のための読みきかせの会」を結成。大型絵本と朗読と音楽の生演奏の三本柱で、幼稚園、保育園、小学校、病院、老人ホームなどを訪れて独自の絵本の世界を提供し続けている。結成当時からスタッフは変わることなく、関東を中心に年に100回ほどの公演を現在に至るまで続けており、総公演回数は約1,350というから驚きだ。

「多くの家庭と同様に我が家でも絵本を読んでいましたが、それはあくまで子供を寝かしつけるための道具としてでした。それが娘の5歳の誕生日のプレゼントにある方が贈ってくれた、1冊の絵本との出会いによって一変しました。それが、『つりばしゆらゆら』(作：森山京、^{みやこ}絵：土田義晴)です。もしかしたら、絵本は子供だけのものじゃなくて、一生懸命に子供たちを育てている親御さんに向けてのメッセージもたくさん含まれているのではないかと。この絵本の素晴らしさを自分の手で伝えられないかと思ったのが、会を結成した動機ですね」

『つりばしゆらゆら』は、作者の森山京さんが手掛けた“こんすけシリーズ”の最初の絵本。中井さんに絵本の概念を変えさせたその内容は――。

「こんなお話です。キツネのこんすけ君という主人公が、吊り橋の向こうに自分と同じ年頃の女の子がいるのを聞いて、一度も渡ったことのない吊り橋を渡って会いにいかうとする。でも、その橋は細くて、ユラユラ



▲ スタートから変わらない「大人と子供のための読みきかせの会」のメンバー

揺れて、とっても怖い。友達は『大人になれば渡れるよ』と言うけれど、こんすけは勇気をふりしぼって何度もチャレンジして、一步步距離を伸ばしていく。そんな描写が延々と続きます。いじらしいくらい頑張ります。でも結局は渡ることができず、橋の向こうの女の子に『また いつか あそぼ』という言葉を残して物語は終わります。

えっここで終わり？ 普通なら女の子に会えて、ハッピーエンドになるはず。直後はそんな感想を抱きました。でも時間がたつにつれ、自分の幼い頃のことが思い出されました。そういえば私も子供の頃、大人から『頑張れ、頑張れば出来るよ』と言われたけれど、出来なかったこと、途中で止めざるを得なかったことがたくさんあったなって。同時に、隣にいる5歳の娘に、私はこれまで何回頑張れって言ってきたのかなって。何度も言ったはずです。でも、きっとこの子も大きくなるまでに、頑張ったけど出来なかったこと、思い通りにならないことをいっぱい経験するだろうな、そう思った途端、涙が止まらなくなりました。思い通りにならないことはいっぱいあるけれど、それは決して不幸じゃない。上手いかわからないことの中にも幸せはあるんだよ、そんなメッセージを受け取ったのです。『そんなに肩肘張って子育てしなくても、あなたがそうなったように、あなたの子供もちゃんと大人になっていくから大丈夫だよ』と、森山先生

が絵本を通して私に語りかけてくれたような気がしました。先生は、残念ながら今年1月に急逝されました。生前、先生が『あなたの演じるこんすけ君が好きよ』とおっしゃってくれたことが、私の大きな支えになっています」

あくまでボランティア

『つりばしゆらゆら』を皮切りに、森山京さんの他の作品を含むいくつかの作品をレパートリーに加えながら、読みきかせの会は約20年もの長きにわたり公演を続けている。入場無料、無報酬、特定のスポンサーは付けないというスタイルも、スタートから変わらず。会場に募金箱を設置して、集まった募金の中から必要経費のみを引き、残りは積み立てて慈善団体、福祉団体に寄附するという方針も貫き通している。

「あくまでボランティア活動、というスタンスを崩したくありませんでした。演じる我々にとっても、このスタイルは自由でやりやすいですね。募金を寄附する先は、赤十字やユニセフなどの大きな団体ではなく、我々の集めたお金がどのように使われたかトレースのできる、規模が小さく、ピンポイントの支援をしている団体にしています。私の親友でもあった夏目雅子さんのひまわり基金が最初で、以後、アイメイト協会、日



本聴導犬協会などに寄附し、東日本大震災、熊本地震、このあいだの西日本豪雨などの災害に対しても支援させていただいています」

音楽の力

中井さんの読みきかせの会では、大型絵本とともに生の演奏も大きなポイントとなっている。演目に応じてピアノ、箏、尺八、チェロなどの楽器を使い、時には楽器の説明も行っているという。

「描かれた絵本の世界を立体的なものとするのに、音楽の力は不可欠だと思います。最初の『つりばしゆらゆら』の時、オリジナルのテーマ曲を作って演奏することで情緒豊かな作品に仕上がりと、それ以来、音楽は欠かせないものとなりました。楽器の説明では、尺八などはほとんどの子供が聴いたことがなく、ドレミファソラシドを吹くだけで歓声が上がります(笑)」

2006年、女優・中井貴恵としての表



▲ ピアノ、チェロ、箏、尺八とコラボしての朗読会

現活動として、朗読と楽器演奏だけの「音語り」というプロジェクトもスタートさせた。

「大人にも聞きにきて欲しいと始めた読みきかせの会に、いつしか大勢の大人が詰めかけるようになり、今度は大人に向けたものもやってみたいと思ったのがきっかけ。初めは絵本『あらしのよるに』（作：木村裕一、絵：あべ弘士）をジャズピアニストの松本峰明さんと一緒に、以後、小津安二郎監督の『晩春』『東京物語』などのシナリオを朗読用にアレンジし、ステージで語ったり、CD化しています」

自分にしかできないこと

武蔵野と中井さんとの不思議な縁を感じる出来事があった。中井さんに本誌に登場していただこうと編集会議で話し合っていたまさにその日、武蔵野の第一幼稚園で読みきかせの会が開かれていたのである。

「子供たちは元気で反応も良かった

ですし、他の施設よりご父兄の参加が多いと思いました。いつも公演のあとに演目の絵本を即売するのですが、持参したものは売り切れ、追加注文するほど。熱心さが伝わってきました。お伺いできて良かったですね」

最後に、武蔵野の学生へのメッセージと、ご自身の今後の抱負を語っていただいた。

「学生の皆さんには、あなたにしかできないことを探して欲しい。『あなたが必要なのよ』と言われるようなことのできる人になって欲しいと思います。大きなことでなくてもいい、何でもいい。適材適所という言葉のように、ここにはあなたしかいない、そう思われるような人になってください。今後の活動としては、来年、読みきかせの会の20周年記念として、子供たちからのリクエストの多かった日本の昔話をやろうと準備しているところです。あと、大人が気軽に來て、笑って、泣いて、楽しんでもらえる敷居の低い朗読会がやりたくて、

昨年から渋谷のライブハウスを会場に、公演中も飲食自由の『おとな絵本の朗読会』を始めました。来年には音語りの小津安二郎シリーズも10周年を迎え、6作品すべてを連続上演する公演も控えています。これからも、私にしかできない朗読の道に邁進したいと思っています」



▲ プラームスホール ホワイエにて、中井さんと本学福井直昭副学長。副学長の教え子が、かつて中井さんのお子さんのピアノの先生をしており、ここでも武蔵野と中井さんの不思議な縁が感じられる

音楽の万華鏡 43

記念年の作曲家クーブラン

本年生誕350年を迎えたフランスの作曲家 フランソワ・クーブラン(1668-1733)は、J.S.バッハと同世代であり、バッハ家と同様に数世代続いた音楽の名門の出である。一族の音楽家は173年間にわたってパリのサン＝ジェルヴェ教会のオルガニストを務めている。フランソワは1693年に25歳の若さで国王ルイ14世の王室礼拝堂オルガニストに抜擢され、王室のクラヴサン(チェンバロ)教師、そして宮廷作曲家として活躍した。当時からフランスの代表的音楽家として尊敬され、「大」クーブランと呼ばれていた。

クーブランはオペラは作曲せず、器楽作品では《リュリ賛歌》や《コレリリ賛歌》によってフランスの音楽様式とイタリアの音楽様式とを融合することに成功した。しかし器

楽作品の中で特に注目されるのは、それぞれ4～23曲の小曲から成る27の組曲(オールド)が収められた4巻の《クラヴサン曲集》(1713-30年出版)である。多彩な小曲は舞曲のリズムに基づいてはいても詩的で幻想的な標題を持ち、肖像画のように人物を描写し、自然を描き、謎めいた比喩を示す。

さらに、クーブランのクラヴサン教師としての面を反映しているのが、『クラヴサン奏法』(1716年出版)である。ここでは、教授法と最初の2巻の《クラヴサン曲集》に収められた楽曲の演奏法が述べられている。中心部分での指使いや装飾音の演奏に関する綿密な指示は、J.S.バッハにも影響を与えた。また、クーブランはフランスでは実際の演奏とは違った形で記譜されることに注意を促す。フランス人は順次進行のいくつかの8分音符を、同じ長さの音符で記されている、付点を付けて演奏するのである。クーブランは実例として、8曲のプレリュードを作曲している。これらはフランス・クラヴサン楽派の伝統でもあった小節線のないプレ



図版：Bibliothèque nationale de France, Re. F-69 p.58

リュードではなく、曲中に小節線がある。しかし、プレリュードは本来自由な作品であり、図版の第6曲のような「拍節をはっきり(ムジュレ)」という指示がないところでは、拍子にこだわらず自由に演奏するように注意している。

寺本まり子(本学音楽学特任教授)

緑に包まれ 新たな風景をデザインした音楽の街 「ランドスケープデザイン」

(文：福井直昭 副学長)

ランドスケープ(英語：landscape)とは、風景、景観、眺めを意味します。それらを建築物と一体的に構想すること、つまり建築設計と連携して、植栽、舗装などの外構・外部環境をデザインすることを、ランドスケープデザインといいます。新たな都市型キャンパス内に、学生が豊かなキャンパスライフを謳歌できるよう様々な配慮をもって形成されたランドスケープを、福井直昭副学長がご紹介します。

建築群の内外でみせる異なる2つの表情

これだけの規模のキャンパスを閑静な住宅街の中に建設したため、建物内側は地下1階から地上につながる立体的なサンクンガーデン(リストプラザ)を中心として開放

的に構成し、反対に外側は遮音のために閉じた構成としました。その相反した構成をまとめている大きな要素が、今回紹介するランドスケープデザインです。

敷地外周部は旧キャンパスのようにフェンスで閉ざすのではなく、多種多様な植物を植え歩道も積極的に整備することで、地域と共存する大学の姿勢を表明しています。一方、キャンパス内部のリストプラザは舗装材(タイル)と高木のみの構成とすることで、シンプルに洗練された木立の広場が創出されています。豊かな緑で包まれた都市型キャンパスの実現です。

みどりで街とつながる

江古田駅北口の目の前に、緑の森に覆われた由緒のある浅間神社があります。ここから大学に続く道は古くからあるこの地域の主要動線です。この境内の大ケヤキに代表される緑の記憶を沿道に連続させるために、キャンパスのエントランス周りに街に開いたポケットパークを設け、そこに大学のシンボルツリーとして、ケヤキを植えました。さらに緑が目飛び込んでくるよう傾斜した植栽地を敷地東側につくり、緑の景観を北側に延長しています。この斜面状の植栽地には高木群も入れて、東側から見た建



▲ キャンパスの中心に位置する憩いの空間、リストプラザ。シンプルで洗練された木立の広場が創出されている



▲ シンボルツリーとしてケヤキが植樹されている、街に開かれたポケットパーク

築のボリューム感を低減する配慮もしています。これらの連続した“みどり”は単なる緑化を目的としただけではなく、今後この緑豊かなキャンパス空間に触発されて地域の緑のネットワークが構成されたとき、その中核となることを願って創り出されました。

今回貴重な角地を地域に開放したわけですが、メインエントランス前には、より広がりを感じるように、水平性を強調した存在感のある御影石による石貼の長ベンチを設けました。「ブラックファンタジー」という、鉱物の結晶が所々輝き美しく、柄の変化が楽しめる意匠性の高い石種ですが、ベースカラーが黒地なのでシックな印象を与えて



▲「ブラックファンタジー」の名にふさわしい美しい輝きの長ベンチ

います。一見ミニマル・アート作品にもみえるこのベンチと、街角のアイストップであるシンボルツリーがもたらす木陰により、楽器を抱えた学生や音楽教室に通う親子がひと時のくつろぎを得る場を創ることができました。

キャンパスのコア 「リストプラザ」と調和する植樹

前述したように、建築群に囲まれた中庭リストプラザは舗装材と高木だけで構成するため、新緑、紅葉、落葉などによって季節感をもたすことができるよう、落葉樹を植えることにしました。様々な樹種を検討しましたが、最終的には新緑・紅葉の彩りはもちろん、凛とした幹の垂直性、落葉したときの繊細な姿、さらにはコミュニケーションの場に相応しい緑陰と陽だまりをつくり出す柔らかな葉な

どから、カツラを選びました。それも単純にカツラを集めて植えるのではなく、地下および地上の広場、ブリッジ、建築群に統一感をもたらすため、極力同じ姿のものを選定しました。類似した枝の形を求め、あえて葉の落ちた冬に木を探したわけですが、必要な本数が揃うまで何度も遠方の圃場



▲ リストプラザで鮮やかな黄葉を見せるカツラ

に出向くという苦勞がありました。樹木は葉の茂った時期に注目しがちですが、落葉した今冬には是非じっくりと形の揃った美しい姿を見ていただきたいと思います。

プラザに下りる大階段の踊り場にもカツラを植えています。これも緑により上下の空間を立体的につなげる工夫です。また、西側の階段足元には、様々なイベントに活用できるよう舞台的な小段を設け、「見る見られる」の関係性が生まれることを期待しました。階段を単なる上下の移動通路ではなく、プラザの風景の一部として位置付ける配慮ですが、これは今年のミューズフェスティバル(学園祭)でも、学生の皆さんが見事に具現化してくれました。



▲ ミューズフェスティバルの際には、舞台的な小段を利用してリストプラザも演奏会場に

レガシーとしての大桜

既刊でたびたびご紹介しているように、今回の建替えに伴い旧キャンパスの記憶の継承としていくつかの要素を残していますが、外構では土地の記憶と歴史性を感じるシンボルとして大桜(ソメイヨシノ)を保存しました。この桜の根を保全するためにS棟の位置が決まったことを考えると、この古木が旧建物で唯一保存されたベートーヴェン



▲ 学園の伝統の象徴、道路沿いの大桜

ホールと並び、今回の建築の全ての始まりと言えるかもしれません。

桜はもちろん単に保存するだけではなく、新たなランドスケープデザインの構成要素として積極的に活用しています。具体的には、盛り上がった根を保護するために桜周囲の地盤をあげる必要がありました。足元を厚みのある板状の石を並べてボリュームのある植え込みの立ち上がり設けたほか、園路の位置や高さもすべて桜を基準に決められています。コンクリートの基礎などもこの桜周りには極力使わないよう細かい配慮がなされています。

毎年桜の開花を楽しみにされている近隣の方々からも、「塀もなくなり、建替え前より桜の存在感が増した気がする」という声が聞こえてきて、大学の想いが伝わったことを実感しています。

感動の世界へ誘う リズミカルなアプローチ空間 ——ショパンプロムナード

大桜からベートーヴェンホールまでは、まさにレガシー同士を結ぶ大学の歴史を感じさせるエリアです。そこに緑と石の化粧壁、舗石のボーダーを配し、現代的でリズミカルなアプローチ空間を創り出しましたが、この空間を彩るのが大学のコレクションである楽聖たちの胸像群です。



▲ ポーランド共和国から寄贈されたショパン像

1960年にベートーヴェンホール落成を祝しドイツボン市より寄贈された「ベートーヴェン像」、1974年にポーランド共和国から寄贈された「ショパン像」などの由緒正しい胸像群は、まるで美術館内を歩いているような情趣を与え、人々をこれから始まる感動の世界へと誘います。そのような風雅から、ムソルグスキーの組曲《展覧会の絵》の「プロムナード」が想起され、入口付近で存在感を放つ「ショパン像」と合わせ、このエ



▲ 多彩な胸像が美術館内を歩いているような情趣を与えるショパンプロムナード

リアを「ショパンプロムナード」と命名しました。



▲ 徳川家光公の墓所 大猷院(世界遺産)に奉獻され、旧キャンパスの庭園に置かれていた石灯籠

ホールホワイエの借景

ベートーヴェンホールやブラームスホールと西側住宅地の間には、高木から低木・地被類まで多様な緑を多段的に植栽しています。公演後、客席からホワイエに出た聴衆の目に最初に飛び込んでくる景色として、多くの木々で構成された豊かな緑を提供することで、心地よい興奮を和ませることを

を意図しています。なお、かつて慶安年間に徳川三代将軍家光公の墓所である日光山輪王寺大猷院(世界遺産)に奉獻され、昭和30年より旧江古田キャンパスの庭園に置かれていた石灯籠は、ブラームスホールのホワイエから見えるキャンパス北西緑地に再設置され、趣を添えています。

* * * * *

建物とともに、自然条件や街のコンテクストまで読み取り、新たな風景をデザインした江古田キャンパス。樹木の植生、太陽の動き、月の明かり、風の流れ、石のバランス、木々のざわめき、そして街の様子——「音楽芸術の研鑽」を行う武蔵野の学生には、素晴らしい外界の諸現象に敏感であって欲しいと願っています。



▶ 夕陽差し込むS棟教室越しに見る大桜

卒業生インタビュー

アンサンブル好きからコレペティートアに

● 平野小百合 ●

(コレペティートア／ウィーン国立音楽大学声楽科専任講師)

自分が好きな音楽を生活の糧にしていくには？と追求した先に見つけた憧れの職業が“コレペティートア”。右も左もわからないまま飛び込んだウィーンで、将来の理想像ともいえる人物に出会ったことで運命が変わる。現在、コレペティートア、ウィーン国立音楽大学声楽科の専任講師として、またリート伴奏者、オペラコレ

ペティートア、室内楽奏者として幅広く活躍している平野(旧姓:松田)小百合さん。一時帰国された折、江古田新キャンパスで現在のお仕事や武蔵野時代の思い出などについてお話を伺いました。

(2018年6月13日インタビュー)

これが私の進む道

—— 平野さんは、武蔵野を卒業後にウィーンへ留学されますね。

平野 私は高校時代にブラスバンドに所属したり、友達とバンドを組んだり、ずっとアンサンブルが好きでした。ですから大学院修了を前に将来は何を生活の糧にするのか真剣に考えた時、人と一緒に演奏する仕事に就けたらという結論に至りました。アンサンブル、中でもリートの伴奏が好きでしたが、残念ながらそれだけで一生食べていくのは難しい。また単なる“伴奏者”ではなく、“共演者”として発言権を持つには、まず自分がきちんとした技術と知識を身に付けてはならない、とも思っていました。

“コレペティートア”については、学生時代、声楽学科の金光良美先生からヨーロッパにはそうした職業があることをお聞きして、憧れを抱いていました。でも、この時点では具体的な知識はまったくありません。当時は国内に養成する専門的な科もなく、どうしてもこの職に就けるのかわからないまま、何となく就職活

動をしていました。音大では決して優秀な学生ではなかった私に、それだけの実力があるのだろうか？という不安もありました。そうした時期、武蔵野の田口宗明先生の下で練習伴奏などをさせて頂きながら、リート伴奏者のレッスンを受けたり、留学経験のある方からお話を伺ったりしているうちに、思いきって外国に行ったほうがスキルアップできるのではと考えるようになりました。そこで、リート伴奏法に加え、オペラコレペティツィオンや室内楽などを多岐にわたり勉強できるオーストリア・旧ウィーン市立音楽院への留学を決定しました。

—— なぜ留学後、ヨーロッパに残って就職されたのでしょうか？

平野 現在、武蔵野でピアノコラボレィティブアーツの教授をされている三ッ石潤司先生が、当時、ウィーン国立音楽大学の声楽科でコレペティートアとして働いておられ、留学直後、ある声楽クラスの発表会で演奏されている姿を目の当たりにする機会がありました。教授や生徒た



平野小百合 Sayuri Hirano

県立横須賀高校、武蔵野音楽大学卒業、同大学院ピアノ専攻修了後、ウィーンへ留学。私立ウィーン音楽大学(旧ウィーン市立音楽院)伴奏科にて、歌曲伴奏法・器楽伴奏法、その後文化庁新進芸術家在外派遣研修員としてオペラコレペティツィオンを修士課程において学び、全科首席で修了。ピアノを中河幸、サリー・サージェントの各氏に、伴奏法をキャロリン・ヘイグ、クリスティン・オカルンドに師事。ベルヴェデーレ国際声楽コンクール・コレペティツィオン部門にてベーゼンドルファー特別賞を受賞。フォルクスオーパーでのバレエ“青髭公の秘密”でのピアノソロは、新聞紙上にて賞讃される。アン・デア・ウィーン劇場やウィーンカンマーオーパーにてコレペティートアを務める他、ソリスト、歌曲伴奏者、室内楽奏者としてヨーロッパ各地ならびに日本にて演奏活動を行っている。現在、ウィーン国立音楽大学声楽学科専任講師。ウィーン在住。



▲ 平野さんが尊敬してやまない三ッ石潤司先生とブレゲンツで再会

ちから厚い信頼を受け、活躍されている姿を拝見し、その方が同じ日本人ということで大きな衝撃を受けました。それまでは、半年か1年ほど研鑽を積んで帰国するつもりでしたが、その瞬間、ここで、この職種で、どこまで自分の力が通用するか試してみたい、という思いに明確に変わったのです。

大学で研鑽を積みながら実践の場へ

—— 音楽院を出て、すぐ仕事に就くことができたのでしょうか。

平野 武蔵野時代、器楽やリートの伴奏は随分しましたが、留学した時点でオペラは全く知りませんでした。最初の1、2年は音楽院の授業と並行して語学学校に通い、さらに週に2、3度は国立オペラ座の立見席でオペラを鑑賞する忙しい日々を送りました。ドイツ語もままならないのに、そのドイツ語でイタリア語を勉強しなくてはならなかったり、また経済的にもかなり切り詰めた暮らしをしていましたが、当時はあまりにも必死で、不思議と辛くは感じませんでしたね。

リート伴奏科を修了した年、タイミング良くグラーツ国立音楽大学が臨時採用でコレペティートアを募集

していて、書類選考、オーディションに合格して採用となりました。ビギナーズラックですね。音大で働きながら、音楽院にも在籍し、自分の勉強を続けました。コレペティツィオンという科は実践に近く、実際の仕事の現場で困っていることを自分のレッスンで先生に相談して解決する、ということも度々ありました。

—— ウィーン国立音大ではどのような授業、レッスンを受け持っていますか？

平野 教育音楽学科や教会音楽学科を経て、2005年から声楽学科に所属しています。現在は主にソロ・コレペティツィオンを受け持っています。これは学生とマンツーマンで行う授業で、入学したての学生などに、音程やリズムを修正するという基本的なことだけでなく、有節歌曲の歌い方、バッハとヘンデルの装飾音符の入れ方の違いなど、音楽のノウハウを1から10まで指導します。修士課程にあたるオペラ科の学生のレッスンでは、それぞれ与えられたオペラの役柄を、オーケストラパートとそれ以外の役すべてを歌ったり弾いたりしながら一緒にオペラ1本通して勉強したり、卒業試験やコンクール、オーディションを受けに行く際に必要なアリアの曲作りを手伝ったりします。



▲ 公式伴奏を務めたシュタイヤーシューベルト歌曲コンクールのファイナルにて。優勝者クリストフ・フィラー氏と平野さん

多彩な芸術に親しむ

—— コレペティートアという仕事を簡単にご説明ください。

平野 一言でいえば、何でも屋ですね。伴奏者であり、指導者であり。大学では教授と学生、劇場では指揮者・演出家・歌手たちの真ん中にいて、中継ぎ的な役割を果たします。仕事内容は非常に多岐に渡り、単なる伴奏から歌手の譜読みや曲作りのお手伝い。またオペラ制作においては、音楽稽古と並行し舞台稽古時にオーケストラに代わって歌以外の音楽を全て担います。アン・デア・ウィーン劇場の場合、6週間かけて1本のオペラを制作しますが、オーケストラが入っての練習は最後の1週間だけ。それまでの間、一人で毎日6時間に及ぶ舞台稽古でオーケストラの代わりを務め、歌手・演出家・指揮者に、実際にオーケストラが来た時にはどのような響きになるのかを、ピアノで表現し伝えなくてはなりません。

—— コレペティートアに求められる能力や技能は？

平野 多岐に渡るレパートリーを弾きこなす柔軟な技術、長時間のハードワークに耐えられるスタミナ、忍耐力、精神力。精神的なタフさは特に必要だと思います。またシチュエーションによって必要とされる要



▲ ウィーン国立音大主催夏期マスタークラス オペラコース修了コンサート後の記念撮影

素が違うため、臨機応変に対応できる柔軟性も大切です。それと、私の唯一の強みでもある、初見が効くこと。これは子供の頃、姉が持っていたビートルズや松任谷由美の楽譜を見て、片っ端から弾き歌いをするという遊びをよくして、そこから培われたのかもしれません(笑)。

—— この仕事を目指す人は、学生時代に何を勉強したら良いでしょう？

平野 音楽に限らず、美術、歴史、文学など幅広い分野に親しむことです。例えばバロック時代の形式について説明するとき、当時の生活のリズムや風習を知っていれば、より説得力が増すはず。そういう意味でも幅広い知識を持ち、引き出しを多くしておくことが必要でしょう。練習室にこもって練習することも大切ですが、多くの芸術、多くの刺激に触れるべきだと思います。あと、自責の念もこめてですが、語学に関してはどれだけやっても損はありません。とにかくコミュニケーション能力が求められます。

—— 大学の講師以外では、どのような活動をされていますか？

平野 オペラ制作にコレペティートアとして携わったり、オーケストラでピアノやチェレスタを担当したりしています。それ以外ではオーディションの伴奏、コンクールやマスタークラスの伴奏、オーディションを受ける前の歌手のコーチングなども行っています。

何事も一つひとつ丁寧に

—— 武蔵野時代を振り返って、印象に残っていることは？

平野 思い出すのは、入間の山の土での寮生活。私はいろいろな楽器や歌の伴奏をしていたので、一日中みんなと一緒にいた感じですね。彼らとよくやったのが、“プレッシャー大会”と呼んでいたもので、試験の前な

どに集まって互いの演奏を批評しあうのです。楽器が違っていると見るポイントが違い、楽しいだけでなく参考にもなりました。それから、ピアノをご指導くださった中河^{みゆき}幸先生。先生の指導法は、一つの曲を非常に丁寧に仕上げるというもの。当時は、周りの友達は次々と新しい曲をやっているのに、自分はなかなか次に進めないのがすごく辛くて(笑)。でも、今になってみると、それが現在の私の音楽づくりのベースになっていて、とても感謝しています。

—— 旧キャンパスの思い出、新キャンパスをご覧になったの感想は？

平野 学生時代は、本当によく図書館とオーディオ室を利用しました。武蔵野は資料が豊富ですから、毎日通って色々な曲を聴きあさったものです。当時は貸出書に自分で記入するスタイルで、何度も借りる盤は番号を覚えてしまったほど。新キャンパスは今日が初めてで、まだ全部は拝見していないのですが、最初の印象としては真ん中に広がりのある空間があり、オープンな感じがとても素敵ですね。

—— 武蔵野の後輩たちへのアドバイス、メッセージをお願いします。

平野 私は未だに1つお仕事を頂くたびに学ぶことだらけで、自分の未熟さに落ち込んで共演者に励まされ、それでも出来上がった作品の素晴らしさに感動し、また頑張ろうと切磋琢磨する毎日です。そんな私が常に肝に銘じているのは、中河先生の指導に通じるものですが、一つひとつを丁寧に、とことん掘り下げて勉強するという。私の仕事ぶりを評価して下さる方がいるとしたら、その



▲ ウィーン、サルバートルホールにて。
リーダーイベント終了後、ご主人で
オペラ歌手の平野 和(やすし)さんと

あたりでしょうか。現在、オペラ歌手の夫と2人の小さな子供たちと暮らしており、子育てと家事、仕事に追われ、自分の時間が全く取れない状態です。勉強したいこと、やってみたい曲、試してみたいアイデアなど沢山あるのですが…。ですから、自分で使える時間がたっぷりある学生時代は、それを無駄にしないで欲しいですね。

—— 最後に、これからの夢、抱負をお聞かせください。

平野 最近オペラのお仕事に恵まれ、嬉しいかぎりなのですが、もともとリートの伴奏や室内楽がしたくて留学したくらいですので、様々な可能性を広げ、多岐に渡る演奏活動をしていけたらなと思っています。



▲ 江古田新キャンパス モーツァルトホールにて

日々の研鑽が感動を生んだ定期演奏会

❖ ウィンドアンサンブル演奏会

武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブルの定期演奏会が、7月12日、14日、東京オペラシティコンサートホール①と和歌山県民文化会館大ホールにおいて行われました。

米国吹奏楽界の重鎮、本学名誉教授のレイ・E. クレーマー氏がタクトを振るなか、コーブランド「市民のためのファンファーレ」でスタート。続くマスランカの「トラベラー」は日本初演であり、旅行者を人生に例えた作曲者の意図を巧みに表現したドラマチックな演奏が感動を誘いました。前半の最後は、ジャズの影響が色濃いガーシュウインの「ヘ調の協

奏曲より第1楽章」。学生オーディションで選ばれたピアノソリストの馬場春英(ヴィルトゥオーソ学科3年)が、ウィンドアンサンブルと息の合った華やかな演奏を披露し、喝采を浴びました。

後半は高 昌帥「桜花の光跡」、オクイン「フラッシュバック」と続き、プログラムの最後を飾ったのは、これも日本初演のジルー「交響曲第5番《エレメンツ》」。ジルー氏自身が「技術的にも楽器編成にも最も苦労した曲」と言う程の大曲を見事に演奏しきった学生たちに、盛大な拍手が送られました。

和歌山公演では、ご尽力いただいた同窓会支部からの要望を受けて、アンコールに「ふるさと」を演奏。客席の大合唱に、ステージ上の学生たちも大感激の一夜となりました。

❖ 管弦楽団演奏会

武蔵野音楽大学管弦楽団の定期演奏会が、9月16日に北海道北見市民文化館大ホール、19日に東



京芸術劇場コンサートホール②で開催されました。

今回の指揮は、将来を嘱望されている若手の実力派、本学講師の角田銅亮氏。オープニングのベートーヴェン「エグモント序曲 Op.84」に続き、同じくベートーヴェン「ピアノ協奏曲 第4番ト長調 Op.58」では、学生オーディションで選ばれた石田詩葉(ヴィルトゥオーソコース2年、16日)、大竹千寛(ヴィルトゥオーソ学科4年、19日)が、積み重ねた練習の成果を存分に発揮し、オーケストラと見事なコラボレーションを披露しました。

後半は、ベルリオーズの代表作でもあり、荘厳かつドラマチックな名曲「幻想交響曲 Op.14」を時に力強く、時に繊細に演奏。満員の会場からは、いつまでも惜しめない拍手が送られました。



武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル米国演奏旅行

2018年12月16日(日) ~ 24日(月・祝)

本学ウィンドアンサンブルが、シカゴで開催される権威ある「ミッドウェスト・クリニック」の第72回大会、その他2回のコンサートに招かれ、渡米することが決定しました。過去2度出演した際には、満員の聴衆からスタンディングオベーションを何度も受けるほどの反響があり、今回も多くの音楽関係者から期待が寄せられています。

指揮はレイ・E. クレーマー本学名誉教授。客演指揮者として、テリー・オースティン、リチャード・ハンセン、ジェームズ・ランブレクト、リチャード・メインという本学ウィンドアンサンブルの歴代指揮者の方々をお呼びし、各演奏会で、それぞれ1曲ずつ指揮していただきます。

またソリストには、ニューヨーク・

フィルハーモニック首席トランペット奏者であり、本学とは3回目の共演となるクリストファー・マーティン氏を招聘。本学ウィンドアンサンブルではお馴染みの作曲家ジュリー・ジルーの「《タブー》-トランペットとウィンドアンサンブルのための-」の世界初演をします。

※公演のスケジュールはP.14をご覧ください。

美しく、華やかに。本学教員によるコンサート

❖ 武蔵野音楽大学弦楽器教員による「室内楽の夕べ」

去る6月19日、本学ブラームスホールにおいて「室内楽の夕べ」が催されました①。出演したのは、著名オーケストラで首席奏者を務めるなど、いずれも経験豊富な本学の弦楽器教員(ヴァイオリン：飯島多恵、増田加寿子、丸山由里子、深山尚久、山中 光/ヴィオラ：恵谷真紀子、渡邊信一郎/チェロ：前田善彦、三宅 進、山崎みのり)。



演奏曲は、ブラームスが27歳のときに作曲した、色彩豊かで民謡風の旋律を持つ「弦楽六重奏曲 第1番 変ロ長調」。そして、メンデルスゾーンが僅か16歳のときに作った、交響曲的なサウンドの「弦楽八重奏曲 変ホ長調」。このホール特有の素晴らしい響きを背景に、熟練のメンバーが息の合った緻密で伸び伸びとした演奏を披露し、美しい音色に酔いしれた満員の聴衆からは惜しめない拍手が送られました。



❖ ケマル・ゲキチ ピアノ・リサイタル

世界的ピアニスト、ケマル・ゲキチ 本学客員教授のピアノ・リサイタルが、去る7月5日、本学ベートーヴェンホールで開催されました②。

前半のベルリオーズ(リスト編)「幻想交響曲」は、完璧な技巧を駆使し、風格あふれるオーケストラ的な表現を披露。後半、親しみやすい曲想のアレン作品、ジャズのライブのようなカプースチン作品の演奏は、まさに色彩感とリズムの饗宴の趣。即興的なアンコールがあり、会場が大盛り上がりとなったところで、ショパンのノクターンで締めるといふ粋な演出でした。

附属音楽教室 夏期ミュージックキャンプ2018

武蔵野音楽大学附属音楽教室の夏のイベント「ミュージックキャンプ」が、今年も本学の「軽井沢高原研修センター」において2泊3日の日程で開催され、普段のレッスンや授業では取り組む機会の少ない室内楽のほか、三音楽教室合同の合奏や合唱などを

行いました。

このミュージックキャンプは音楽だけを学ぶものではなく、参加者全員がコンサートやレクリエーションなどの係りをもち、協力しながら準備をします。小学校3年生から高校生までの生徒が交流することで、高学年の生徒は低学年の見本となるよう、また低学年の生徒は高学年を見習うことで、どの生徒も人間的に成長できる良い機会となっています。

短い準備期間ではありましたが、各自熱心に練習に取り組み、コンサートでは練習の成果を存分に発揮。最終日にはアスレチックなどでたくさん遊ぶこともできました。「音楽」でつながるかけがえのない友達もで



き、夏の良い思い出となったことでしょう。





武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、教育環境整備基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。

学校法人 武蔵野音楽学園

※ご芳名(五十音順)は、平成30年5月1日から6月30日までにご寄附いただいた方々です。それ以降の方々は、次号にて掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきます。何とぞご了承ください。

※本学ウェブサイトからも、クレジットカード決済によりご寄附のお手続きができます。是非ご利用ください。

【同窓生】 伊佐山明郎様 打越孝裕様 大平るみ子様 落合隆吉様 栗原比佐子様 齋藤江美子様 巽 薫枝様 戸谷玲子様 野澤良平様 濱 満様 原口恵美子様 深谷陽子様 藤本すま様 魅力会様

【在学生・同ご父母】 明石邦彦様 新目忠俊様 市原三枝子様 大島有香様 片所寿雄様 我如古 徹様 鴨志田里子様 川口和芳様 清水康子様 新藤達雄様 須永 進様 高木秀樹様 高橋伸夫様 武井孝博様 巽 保夫様 田中利彦様 辻 美隆様 露木賢治様 畑 京子様 本木 正様 間瀬眞行様 松崎智宏様 三木 宏様 茂木義則様 渡邊一雅様

【役員・教職員・一般・他】 加島良和様 菊池英美様 岸田 譲様 佐々木亜紀様 清水吉六様 耕 修二様 田代慎之介様 中川俊宏様 野村邦武様 日高正枝様 牧野早苗様 町田雅彦様 (他に匿名を希望される方4名)

栄冠おめでとう！(コンクール入賞者等)

(順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの)

- 第54回日伊音楽コンクール2018 第1位入賞 土屋優子(平成22年大学音楽専攻卒業、本大学院修了)
- 瑞宝小綬章受章 浅見英夫(昭和36年大学ピアノ専攻卒業)
- 第22回松方ホール音楽賞(打楽器部門)受賞 山口芽依(大学3年打楽器専攻)
- 第1回JOAオーボエコンクール グランプリ、聴衆賞受賞 岡村彩香(平成29年大学オーボエ専攻卒業)
- 第2位入賞 太田妃佳里(平成28年大学オーボエ専攻卒業)
- 戸塚区民文化センターさくらプラザ ピアノグランプリ2018 グランプリ受賞 杉田早苗(昭和49年大学ピアノ専攻卒業)
- 2018 15th アジア国際音楽コンクール 社会人音楽部門 第2位入賞 太田優子(平成20年大学音楽専攻卒業)、●第17回北陸新人登竜門コンサート《管・弦・打楽器部門》オーディション 優秀者、ソリストとしてオーケストラ・アンサンブル金沢と共演 西田裕貴(大学4年コントラバス専攻)、●第21回“長江杯”国際音楽コンクール 管楽器部門 一般の部B 第2位入賞(1位なし) 川鍋さなえ(平成12年大学フルート専攻卒業)、一般の部A 第3位入賞 小牧奈奈(平成23年大学フルート専攻卒業)

※上記の他多数。大学ウェブサイトをご覧ください。

外国人教授紹介 (平成30年度後期)



イリーナ・チュコフスカヤ
Irina Chukovskaya (ピアノ/ロシア)

ロシアのピアニスト。6歳よりタマラ・ボボヴィッチの指導を受け、その後モスクワ音楽院附属中央音楽学校、モスクワ音楽院でヴェラ・ゴルノスタエワ、スタニスラフ・ネイガウスに、同大学院で、ドミトリー・パシキーロフに師事した。さらに米国でテオドール・レヴィンの指導を受ける。7歳の時にウズベキスタンのタシケント・フィルと協演し、13歳で初のリサイタルを行った。1980年開催ショパン国際ピアノコンクール入賞を始め国際コンクールの入賞歴多数。世界各国で、オーケストラとの共演やソロリサイタル、室内楽を多数開催、CDのリリースなど活発な演奏活動を行う。レパートリーは古典から近現代と幅広く、その中には40曲におよぶピアノ協奏曲が含まれている。1999年よりモスクワ音楽院でレフ・ナウモフの助手として教え始め、現在はグネーシン音楽大学教授。本学の客員教授として初来日。



インゴ・ゴリツキ
Ingo Goritzki (オーボエ/ドイツ)

ドイツのオーボエ奏者。フライブルク音楽大学でフルートをグスタフ・シェックに、ピアノをピヒト・アクセンフェルトに、さらにデトモルト音楽アカデミーのハンス・ペーター・シュミッツのもとでフルートを研鑽後、オーボエに転向。ヘルムート・ヴィンシャーマンに師事し、1964年ドイツ音楽大学コンクールオーボエ部門第1位、ブラハとジュネーヴの国際音楽コンクール入賞。バーゼル交響楽団、フランクフルト放送交響楽団の首席奏者を務めたほか、1976年からハノーファー音楽大学の教授となりその後シュトゥットガルト音楽大学でも後進の指導に当たった。独奏および室内楽活動、マスタークラス、レコーディングを活発に行い、現在は主に指導者として活動をしている。2002年ロットヴァイル文化財団芸術賞受賞。



クリスティアン=フリードリヒ・ダルマン
Christian-Friedrich Dallmann(ホルン/ドイツ)

ハンス・アイスラー音楽大学にてクルト・バルムのもとで研鑽を積んだ後、1978年にマルクノイキルヒェン国際音楽コンクールホルン部門で第1位受賞。同年ベルリン交響楽団(現ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団)のソロホルン奏者となり、以後22年以上首席奏者を務めた。またヘルムート・リリング音楽監督のもとシュトゥットガルト国際パッハアカデミーに招かれ、数多くのプロジェクトでソロホルンを担当。さらに古楽器による演奏活動も、ベルリン古楽アカデミーのメンバーとして行い、国内外への多くの演奏旅行とCDの録音を行った。ハンス・アイスラー音楽大学、デトモルト音楽大学を経て、現在はベルリン芸術大学教授として後進の指導にも当たり、優れたホルン奏者を多数輩出している。



レイ・E. クレーマー
Ray E. Cramer(ウィンドアンサンブル指揮/アメリカ)

アメリカで高く評価されるインディアナ大学音楽学部で、2005年まで吹奏楽学科主任教授並びにバンドディレクターとして活躍し、また2009年まで著名なミッドウェスト・クリニク会長の要職も務めた。これまで全米吹奏楽指導者協会会長をはじめ数多くの吹奏楽協会の要職を歴任する他、インディアナ大学最優秀教授賞、Phi Beta Mu 国際優秀賞等多くの賞を受賞。2012年には権威ある National Band Association Hall of Fame of Distinguished Conductors(吹奏楽の優れた指揮者の栄誉殿堂)に選ばれ、全米、日本等で客員指揮者、指導者、審査員として広く活躍している。武蔵野音楽大学名誉教授。

平成30年度 10月～12月 演奏会のお知らせ

入間市「市民コンサート」 武蔵野音楽大学管弦楽団演奏会

10月13日(土) 14:00 入間市市民会館 無料(全席自由・※要入場整理券)
 主催=入間市立中央公民館 ※入間市立中央公民館へ直接お問い合わせください。TEL.04-2964-2413
 指揮=時任康文 ハープ独奏=三谷真珠子(大学院修士課程ヴィルトゥオーゾコース2年、本学学生オーディション合格者)
 曲目=ニコライ:《ウィンザーの陽気な女房たち》序曲、ボイエルデュー:ハープ協奏曲 ハ長調、チャイコフスキー:交響曲 第5番 ホ短調 Op.64

イリーナ・チュコフスカヤ ピアノ・リサイタル 11月1日(土) 18:30 ブラームスホール(江古田) ¥1,000(全席自由)
 曲目=モーツァルト:ピアノ・ソナタ 第18番 ニ長調 K.576、シューベルト:4つの即興曲 D.899 Op.90、ショパン:バラード 第3番 変イ長調 Op.47 他

ニュー・ストリーム・コンサート35 ～ヴィルトゥオーゾコース演奏会～

11月14日(土) 19:00 トッパンホール ¥1,500(全席自由)
 出演=斎藤佳音(Sax)、結束真琴(Pf)、山内菜緒(Sop)、伊藤菜々子(Pf)、箕輪美希(Fl)、市村ひかり(Pf)

インゴ・ゴリツキ オーボエ・リサイタル 11月16日(土) 18:30 ブラームスホール(江古田) ¥1,000(全席自由)
 共演=青山聖樹(Ob)、岡崎耕治(Fg)、岡崎悦子(Pf、Cemb)
 曲目=ブランク:オーボエ、ファゴットとピアノのための三重奏曲 他

武蔵野音楽大学管弦楽団合唱団演奏会 11月30日(土) 19:00 東京オペラシティ コンサートホール ¥1,500(全席指定)
 指揮=北原幸男 合唱指揮=栗山文昭、片山みゆき
 独唱=山口遥輝(Sop)、杉山由紀(Alt)、鈴木俊介(Ten)、井出壮志朗(Bar)
 曲目=ワーグナー:《リエンツィ》序曲、ベートーヴェン:交響曲 第9番 ニ短調 Op.125(合唱付き)

ジェニー・ザハリエヴァ ピアノ・リサイタル 12月5日(土) 18:30 ブラームスホール(江古田) ¥1,000(全席自由)
 ドビュッシー没後100年特別プログラム
 曲目=ドビュッシー:前奏曲集 第1巻、前奏曲集 第2巻

武蔵野音楽大学室内合唱団演奏会 12月7日(土) 19:00 ベートーヴェンホール(江古田) ¥1,000(全席自由)
 指揮=栗山文昭、片山みゆき ピアノ=齋藤誠二 オルガン=秋本奈美
 曲目=グレゴリオ聖歌、グノー:コラール・ミサ、新実徳英:混声合唱とピアノのための《花に寄せて》 他

武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会 12月11日(土) 18:30 東京芸術劇場 コンサートホール ¥1,500(全席指定)
 指揮=レイ・E.クレマー トランペット独奏=クリストファー・マーティン(ニューヨーク・フィルハーモニック首席奏者)
 曲目=ヴァルチック:プロトン(世界初演)、ジルー:《タブー》トランペットとウィンドアンサンブルのための(世界初演)
 ミーチャン:岸辺に打ち寄せる波(世界初演) 他

武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル米国演奏旅行 12月17日(月) 19:00 セント・チャールズ・イーストハイスクール
 12月18日(火) 19:00 ウナズ・グローヴ・サウスハイスクール
 12月20日(木) 19:30 第72回ミッドウェスト・クリニック出演(マコーミック・プレイス)
 指揮=レイ・E.クレマー
 トランペット独奏=クリストファー・マーティン(ニューヨーク・フィルハーモニック首席奏者)

お問合せ ●武蔵野音楽大学演奏部 TEL.03-3992-1120

※やむを得ない事情により、出演者・曲目等を変更する場合がありますので、あらかじめご了承ください。

※チケットは武蔵野音楽大学ウェブサイト <http://www.musashino-music.ac.jp/> でも予約ができます。

平成30年度 武蔵野音楽大学・附属高等学校 冬期講習会のお知らせ

講習会名	実施期間	申込受付期間	会場
音楽大学受験講習会	平成30年12月23日(日)～26日(水)	平成30年11月26日(日)～12月10日(月)	武蔵野音楽大学江古田キャンパス
高校受験講習会	平成30年12月24日(月)～26日(水)	平成30年11月26日(日)～12月10日(月)	

詳細は本学ウェブサイトまたは講習会要項でご確認ください。

各種資料の請求について

武蔵野音楽大学や附属高等学校等、各種資料のご請求は、本学ウェブサイト内の「資料請求フォーム」をご利用いただくか、広報室までご連絡ください。

【各種資料請求先】武蔵野音楽大学 広報室 TEL.03-3992-1125

本学ウェブサイト <http://www.musashino-music.ac.jp/>



編集後記

中井貴恵さんが、1冊の絵本から得た感動を多くのの人に伝えようと始めた「大人と子供のための読みみかせの会」。子供たちのキラキラした瞳と

公演先で出会った人々との温かいふれあいに、中井さんたちも心が満たされるといいます。感動のキャッチボールが、20年もの長きにわたり続いている理由なのかもしれません(編)。

四胡

中国 全長79cm

楽器鑑賞の第一義的な楽しみは、音色を聴くことであるが、楽器に施された精緻な装飾、造形に込められた思いに着目することもまた醍醐味の一つである。

この写真の四胡は、随所に中国らしいモチーフを見ることができる。棹の頭には「カササギと梅」、棹下部には「龍」、糸巻きは「松竹梅」が彫られており、附属の弓にも「カササギと梅」が施されていて楽器との統一感が見られる。カササギは中国語では「喜鵲」と表記され、また梅は春を告げる花として縁起がよいことから、両者は吉祥を表すモチーフとしてともに用いられることが多い。また日本でも、中国伝来七夕伝説で、カササギが織姫と彦星の逢瀬で天の川の懸け橋となっていることは有名などである。

「龍」は皇帝を表すシンボルであり、「松竹梅」というモチーフは、日本のような吉祥の意味合いとは少し異なるものの、それぞれ冬でも枯れずに葉や花をつけ豊かな生命力を感じさせる存在から、歳寒三友として好まれている題材である。胴は縁起のよい八角形でヘビ皮が張られている。

中国には二胡をはじめ数多くの弓奏楽器類が発達しており、もとは元の時代に蒙古から伝わったものである。四胡は華北、東北そして内蒙古で用いられる。2本ずつ同音に調律するため、実質的には二胡に近いが、あえて4本の弦を用いるのは、太さの異なる弦を同音に調律することによって生じる微妙な「うなり」を得るためと考えられる。また、弓毛を二束に分けて、一、



二弦と三、四弦の間にそれぞれに挟み込み、弓毛の両面を用いる演奏方法はユニークで面白い。

(武蔵野音楽大学楽器ミュージアム所蔵)

❖ 目次 ❖

無限に広がる朗読の世界	1
中井貴恵	
音楽の万華鏡	4
記念年の作曲家クープラン 寺本まり子	
江古田新キャンパス探訪⑥	5
ランドスケープデザイン	
卒業生インタビュー	8
アンサンブル好きからコレペティートアに 平野小百合	
MUSASHINO NEWS	11
❖ 日々の研鑽が感動を生んだ定期演奏会	
❖ 武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル米国演奏旅行	
❖ 美しく、華やかに。本学教員によるコンサート	
❖ 附属音楽教室 夏期ミュージックキャンプ2018	
❖ 武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々	
❖ 栄冠おめでとう! (コンクール入賞者等)	
❖ 外国人教授紹介(平成30年度後期)	
❖ 平成30年度 10月~12月 演奏会のお知らせ	
❖ 平成30年度 武蔵野音楽大学・附属高等学校 冬期講習会のお知らせ	
❖ 各種資料の請求について	

武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学別科

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・人間・多摩

❖ 発行 ❖

学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121 (代表)

人間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111 (代表)

バルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711 (代表)

<http://www.musashino-music.ac.jp/>    

2018年10月1日発行 通巻第127号